



博物館友の会より

題字：千葉半匡

文化財ニュース

旧大和田銀行本店社屋が登録文化財に



登録文化財 「旧大和田銀行本店社屋」

営業の規模等に併せて改築を重ねた点も歴史です。

大和田銀行本店本館（現敦博建物）と背中合わせの位置に残る大和田銀行本店社屋が令和三年二月二十六日付で国の登録文化財となりました。現在みなどつるが山車会館の別館として活用しているこの建物は、長らく大和田銀行の初代本店とされてきました。重要文化財となっている建物と合わせて、敦賀の近代史における貴重な遺産です。大和田銀行は明治二十五年に蓬萊二十六番地で創業します。この時は「家屋は自分の借家をあけさせ」と、既存の建物での創業であったことが

『北陸の偉人大和田翁』に見えています。

令和元年度に本格的な調査を行った際確認した棟札には「明治参拾七甲辰歲四月戊子」とありました。また博物館に寄贈されていた大和田銀行新築披露の招待状の「明治三十四年二月二十日」という日付や、改築を重ねてきた建物の現状から来歴を推定しました。この招待状には「弊行義業務日二繁盛二相趨キ為メニ店舗ノ狭隘ヲ告ゲ」とあることから、最初の仮に用意した店舗では手狭で、明治三十四年に同じ場所に新たに建設。倉庫のような建物を再利用したことも考えられています。その後、大和田銀行は一層繁盛してまた手狭となったため、敷地の拡張を伴う大規模な改築が明治三十七年に実施されたようです。またその後、正面を洋風に改築するなどしています。銀行本店機能が博物館建物へと移転した後には、「嶺南木材」という会社が使っていたようです。



大和田銀行新築記念招待状

石に刻まれた古人の祈り

友の会会長 川村 俊彦

敦賀市博の二階展示室には、平安後期に造営された深山寺経塚などの出土品がある。これらは末法の世の乱れに際し、平穏と救済を願って書写した経典を地中に埋納した、古人の祈りが込められた遺物である。また、先頃は石造塔婆の一種である板碑のミニ企画展も行われたが、こうした石造物も、様々な祈りによる営為の所産である。

昨年から引き続きコロナ禍にあつて日々の生活は否応なく慎重にならざるを得ないが、私は、この機会に、疫病や飢饉などの災厄に對する古人の祈りを知るよすがとして、あらためて周辺の石造物を見て回っている。

江戸後期は全国的に飢饉が頻発したが、敦賀にも大きな被害をもたらした。なかでも天保年間の惨禍は甚大で、洲江庵にある無縁塚や、来迎寺野墓地の供養塔は、その惨禍を伝える記念碑である。これについては、商人たちが困窮者に施した施行粥や八五〇人もの死者を出したことなどが、「天保救恤録」（大和

田みえ子文書『敦賀市史史料編第一巻』）という史料に詳しい。

県内では、詳述は省くが越前市の旧本保障屋附近に建てられた天保救荒碑が夙に知られている。

敦賀近隣では、美浜町丹生の龍溪院境内及びその近くに石塔を建てた一字一石経塚が所在する。いずれも江戸後期の靈考和尚の造営になり、前者は三重塔で『わかさ美浜町誌第三巻』に記載がある。

後者は、経塚の標識としては珍しい石塔が二基建つており、うち一基の銘文には、文政六年（一八二三）に法華経八巻を書写した経石六万九千三八四個を納めた旨を記している。台座の願文には「一切衆生皆成仏道」と刻まれ靈考和尚はじめ当時の人々の祈りが伝わってくる。ちなみに、県内の石造物に精通した郷土史家の故山本昭治は、越前若狭を代表する経塚だとこれを評している。（『福井県の経塚』一九八一）

紙幅に限りがあるので自余は割愛するが、飢饉にしろ疫病にしろ、戦う術の限られていた人々にとって、最後は神仏に頼るしか

なかった。かといってそれを否定的に見ているのではない。

様々な造塔を伴う祈りという営為には未来へのまなざしがある。災厄と必死に向き合い、たとえ自らが朽ち斃れても、社会の存続と子孫の安寧を願う切なる想いがある。

今日、私たちは医学という楯に守られ、科学的知見に基づく合理的な防疫の習慣を学んでいる。が、不幸にしてこれらの及ばざる先に救いとなるのは、やはり祈りであろう。

古人の残した祈りに共感しつつ、このコロナ禍を奇貨として、あらためて文化財に触れ、学びを得る喜びを感じているところである



丹生経塚石塔

○令和3年度前半展示の案内

▼一・二階展示室

常設展示「敦賀を彩る歴史と文化」 通年

常設展では、一〜二か月の期間で一部のコーナーを入れ変えながら常設展示をしています。

▼三階展示室

「琳派の美」

四月三日(土)〜五月七日(金)

当館が所蔵する琳派の絵画作品を展示いたします。華やかで優美な世界をお楽しみください。

「南画の世界」

五月八日(土)〜六月十一日(金)

日本絵画のジャンルのひとつである「南画」は、中国に由来します。中国文人の思想に憧れた日本の画家たちが描く、南画の世界をご覧ください。

「敦賀の鷹絵師・橋本長兵衛とその画系」

六月十二日(土)〜七月六日(火)

敦賀の鷹絵師橋本長兵衛の絵画を中心に展示します。

▼二階展示室

特集展示「祭りの面と衣装」

四月二十八日(水)〜六月一日(火)

敦賀のお祭りで使用されるお面や衣装を展示します。

特集展示「天狗党(仮)」

七月七日(水)〜八月三日(火)

天狗党について展示します。

■二・三階展示室

特別展「増補改訂 古写真が語る敦賀(仮)」

戦前編八月六日(金)〜九月五日(日)

戦後編九月七日(火)〜十月五日(火)

敦賀に関する古写真を多数展示します。

■■■■敦賀の古写真大募集！■■■■

あなたのお家に眠っている古写真はありますか？ 博物館では、特別展開催に向けて敦賀の街や鉄道、港等を写した古い写真のご提供をお願いします。

※一九七〇年代(昭和四〇年代)頃まで

【募集期間】

五月三〇日(日)まで

○令和3年度前半行事の案内

▼ワークショップ

「折紙で兜と陣羽織をつくろう！」

五月四日(火・祝)・五月五日(水・祝)

時間未定

▼その他(予定)

歴史ウォーキング

・天狗党ゆかりの地を歩こう

・古写真の地を歩こう

※詳細は広報つるがでご確認下さい

☆☆友の会役員・スタッフの募集☆☆

友の会事務局では役員・行事等のスタッフとしてご協力いただける会員の方を募集しています。ご興味のある方は事務局までお問い合わせください。

ご来館お待ちしております!!



友の会活動報告

～市内史跡見学会だより～

友の会事務局長 面 隆史

県内最大規模の新幹線敦賀駅全容が見え始めてきた二〇二〇年十月十一日(日)に、木の芽川沿い、駅周辺を散策しながら史跡&新幹線工事を見学するウォーキングを行いました。十名程度の事前予約制で敦賀市立図書館(集合)・東洋紡敦賀クラブハウス(外観)・旧木の芽橋欄干・深川架道橋(JR線路下)・眼鏡橋・敦賀駅周辺(解散)にて行われ、午後一時から三時頃まで皆さまと散策の時間を楽しみました。

お洒落な丸窓が印象的な東洋紡敦賀クラブハウス外観を見学し、旧木の芽橋欄干脇から木の芽川を上って到着した深川架道橋(JR線路下)では、最先端技術で築かれる北陸新幹線の巨大な高架橋を下から見上げて感嘆の声が上がりました。次に少し移動して、日本海側屈指の良港敦賀と鉄道の始まりの歴史を伝える、日本の鉄道黎明期における文化財の一つ眼鏡橋を見学し、明治四十二年までの北陸線はこの場所を通り、氣比神宮付近にあった初代敦賀駅、鉄道開通後に飛躍的な発展を

遂げる敦賀港の金ヶ崎駅に繋がっていたのだと、旧木の芽橋欄干、氣比神宮、金ヶ崎の方向を確かめながら当時の様子を思い描く事が出来ました。

最後に遠方より現在の敦賀駅在来線プラットフォームを見学し、土台下に少し見える二代目敦賀駅建設当初からのレンガ基礎部分を確認しました。平成時代にバリアフリー化や交流施設オルパークの開館で新しくなった敦賀駅舎、その土台の一部を支える二代目敦賀駅の基礎、そして後方に高さ約三十五メートルの新幹線敦賀駅が聳える様は連綿とした歴史を感じるものでした。

今後とも益々この会を発展させたく皆さまのご参加よろしくお願い致します。



「資料紹介」

獅子頭置物

現在のコロナ禍同様、過去敦賀でも何度か疫病が流行しています。ここ敦賀で疫病を祓うシンボルとされたのが氣比神宮境内にある撰社角鹿神社の御神体の「獅子頭」でした。平松周家著『氣比宮社記』第一巻『神伝部上』「角鹿神社」の項には、来敦した任那国の王子都奴我阿羅斯等の従者が、王子の国の芸能である獅子舞を当地に伝えたと記されています。古の国際都市敦賀では、海外から入って来た疫病との出会いも早かったのかもしれない。「角鹿」の名前にこじつけた事も考えられますが、ちよつと面白い記事ですよ。



氣比神宮宝物獅子頭置物
昭和44(1969)年/個人蔵
獅子頭を模ったお土産用置物

博物館友の会だより95号

令和3年3月30日発行
発行 敦賀市立博物館友の会
事務局 敦賀市相生町7-8
TEL 0770-25-7033
FAX 0770-47-6131
E-MAIL museum@ton21.ne.jp

〔編集後記〕

市内史跡見学会のなかで、敦賀駅正面に所々残っていた戦前の石畳はどこにいったのかが話題に上がったのですが、つい最近、高早学芸員から駅前に設置されたソーラーパネルの下にあったと教えて貰いましたので、皆さまにもお伝えさせて頂きます。 事務局長